

白雲

2018年
65号
初夏



日本棋院 幽玄の間

特別対談 謝 依旻×伊藤 茂昭

「棋士と弁護士、宝塚との出会い」

- 2018年前半の宝塚／心に残った一作品
- シゲニーの推薦図書 (4)
- 弁護士会の活動から
- 事務所の歴史 (2)



特別対談

謝依旻 × 伊藤茂昭 棋士と弁護士、宝塚との出会い

みなさま、今回は久しぶりに対談を企画しました。
お相手は、女流本因坊の謝依旻(しえい・いみん)さん。
対談の場所は、日本棋院幽玄の間。棋戦でもタイトル戦や上位の手合にしか利用されない神聖な場所です。謝さんとは、宝塚を共通の趣味として、お話の話題は尽きません。実際にお話した内容を、この紙幅に落とすのに、ここで紹介するページの6倍くらいの分を削りました。宝塚から大きな力を受け取り、それをエネルギーとして、お互い生きている実感を共有しています。お話の内容から、是非謝依旻さんの人となりを知っていただきたいと思いますが、これを機に、囲碁ファンならずとも、今後棋戦で活躍する謝依旻さんを一緒に応援していただければ幸いです。

弁護士 伊藤 茂昭

囲碁は5歳の時から

伊藤:今日は、市ヶ谷にあります日本棋院の幽玄の間にお邪魔しています。謝さんは、現在女流本因坊のタイトルホルダー。まず、囲碁を始められたきっかけからお話ししていただけますでしょうか。

謝:私は、台湾の北西部の苗栗市という町で育ちましたが、囲碁を始めたのは5歳の時でしたね。きっかけは兄が囲碁の勉強をしていたことですが、気づいたら私の方が囲碁に夢中になっていました。

その頃、父母から漢字を教えてもらっていて、囲碁の雑誌を見たのですが、そこに載っていた女流本因坊と女流名人がすごくかっこよかったので、「私、将来、女流本因坊になる」「世界一になる」ってみんなの前で言っていたそうです。

伊藤:やっぱり超一流の人っていうのは小さい時から違いますね。

謝:囲碁を始める前は、暗算をやっていて4歳で3級に合格しました。それで父は、この子に何かやらせようと思ったそうです。でも、最初は兄に囲碁のプロになってほしかった。先生は、私にはもう少し大きくなってからと言っていました。それで、教室の外でよく五目並べをして遊んでいました。ところが、そこで、囲碁の五段か六段の先生に勝っちゃったんです(笑)。それを見ていた別の先生が、「あれ、この子!」って思ってくれたみたいで、囲碁を全力で教えますと。それで5歳でしたが、特別に教室に入れてもらって。それから私の囲碁人生が始まりました。

日本での生活

伊藤:日本に来たのは?

謝:12歳の時です。父は、プロを目指すなら早めに日本に行くべきだ、と言っていました。私は、5歳で囲碁を始め、いろいろとやっていくうちに、囲碁の難しさ、厳しさが分かってきた。そして、自分が一番やりたいことは囲碁だと、それでプロを目指すため日本に来ました。

伊藤:日本に来て、どうでした?

謝:最初は、父と母が1〜2か月交代で来てくれました。プロになるまで続きました。

伊藤:通常の学校の勉強はどうしていたんですか?

謝:学校は、行かなかったです。日本語も話せなかったのので、いきなり日本の学校にも行けませんでした。ひたすら囲碁の勉強でした。今思えば、家族も大変だったのかなと。12歳の子に、すべての時間と費用をかけて日本で勉強させる。でもプロになれるかどうか分からないじゃないですか。

伊藤:ご両親の決断もすごいですね。

謝:そうですね。父は信じてくれていたと思いますね。ただ私も、学校に行っていないので、その分、本当に囲碁で何か結果を残さなければ、将来できるものがないと思って頑張りましたね。

タイトル獲得

伊藤:そして晴れてプロ棋士。17歳でタイトル獲得ですね。

謝:タイトルを取るまでに、15、6歳くらいの頃、半年くらいなかなか勝てない時期がありました。本当にやっつけけるのかなって不安もありました。でも、あることがきっかけで、もっと自由に打ちたいって思って、その年にタイトルを取りました。初優勝というのは特別で、やっぱりすごくうれしかったですね。公式戦のタイトル獲得の1か月前に非公式戦、男女関係なくて、30歳以下の棋戦でしたが、決勝戦で男性に勝ちました。その時もうれしかったですね。

それから、公式戦の優勝は女流最強戦という棋戦ですけれど、相手は小西和子先生、1か月前の自分の誕生日に、その先生に別の棋戦で負けていたんですよ。そして決勝戦はクリスマスの日、誕生日に負けて悔しくて悔しくて、そしてクリスマスに勝った。本当にうれしかったです。

伊藤:その後はタイトル戦の常連になって、女流本因坊、女流名人、女流棋聖ではすべて5連覇があり、女流名人戦では9連覇もありました。それぞれ名誉称号を

「諦めたらそこで終わり」というセリフが、苦しい対局中、頭の中で流れて。その言葉があつて、なんとか耐えて、いい結果で終わることができました。 謝依旻





獲得していますね。

謝:そうですね、60歳にならないと、実際には名乗らないので、今は名誉女流名人、名誉女流本因坊、名誉女流棋聖の有資格者ということですね。

伊藤:名人、本因坊、棋聖の3大タイトルに、比較的新しい立葵杯と扇興杯の、5大タイトルを同時に取ったのが2年前ですね。

謝:2年後の今はタイトルが1つしか残っていないんですが、若い子がどんどん出てきて。やっぱり優勝というのは強い人が取るものだと思うので、負けてしまったけど、また自分がどんどん強くなって。

二強時代

伊藤:謝さん一強時代から、藤沢里菜さんとの二強時代という感じに移ってきて、里菜さんがどれくらい強いのか、謝さんがまた巻き返すのか、今、そういう状況だと思えますが、ぜひがんばって奪還してほしいなと思えますが、里菜さんも強いですね。

謝:すごく強いです。

伊藤:そんな後輩をどう思いますか。

謝:もちろん対局の時はライバルですが、碁盤を離れたらもう普通にかわいい後輩で、すごくいい子で、礼儀正しいですし謙虚ですし、すごく勉強熱心ですね。

息抜きと趣味

伊藤:棋士の世界は、厳しいし、気分転換も必要と思

ますが、謝さんはどんなことで息抜きをしていますか？

謝:私は10代の時は、ヒップホップダンスをやっていました。汗をかくとリフレッシュするので、かなりのめり込みましたね。碁を打つ時もベストを尽くしてがんばりたいですし、遊ぶ時も全力で遊びます。

伊藤:最近は何が？

謝:最近は、先生のおかげで(笑)宝塚が。3年前からですね。小さい頃、よく母が、「大地真央さん、すごくカッコいいよ」って言っていました。母は昔、日本に来て大阪でバレエと舞台のお芝居とかもやっていた時期があったんですよ。

伊藤:お母さんに、お会いしたことがありますけど、舞台やお芝居が大好きそうな感じで。

謝:メイクも結構、宝塚っぽいですよね(笑)。小さい頃から不思議に思っていたんですけど。宝塚の皆さんがかっこいいというのはずっと頭にありましたね。ただチケットもどこで買うのかわからなかったし、観る機会がなくて。それが3年前に先生の。

宝塚との出会い

伊藤:私が、東京弁護士会の会長になった年の5月に弁護士会で、囲碁・将棋祭りがありました。懇親会の席上、女流棋士の青葉かおりさんのお話で、宝塚のお話が出ました。そこで、よろしければ、観劇会にご招待しますって言ったら、じゃあ棋士に好きな人がいますから、その人と一緒にしますって。それが謝さんでした。

謝:誘われた時のことは、今でも鮮明に覚えています。2015年の立葵杯決勝戦のあとです。青葉さんはその棋戦のプロデューサーで会津若松にご一緒していました。復活戦のタイトルで勝ちたかったのですが、でも負けちゃったので、東京までの帰り、落ち込んでいました。青葉さんが東京駅で、「あの一、今度、宝塚観に行きませんか?」って。対局前には話せないし、勝ったら話しやすかったんですけど、私は負けてしまって。青葉さんも、いつ言おうかなーと。最後の最後、東京駅で帰ろうとした時に、話してくれたんですね。私はすぐ「じゃあ行きま



幽玄の間

日本棋院市ヶ谷本院の最高峰の棋戦が行われる特別対局室。正面に「深奥幽玄」(しんのうゆうげん)の掛け軸。この書は、ノーベル文学賞作家 川端康成氏が昭和46年に日本棋院会館の落成を記念して揮毫されたもの。「幽玄」は、和歌などと通ずる言葉ですが、「囲碁は二人で創る調和の芸術」ともいわれ、なにやら深淵、哲学的な神秘的な場所です。



す]って。そして、…初めて観た時の衝撃が。

伊藤:「王家に捧ぐ歌」、歌劇「アイダ」のミュージカル版。

謝:本当に、この世界じゃないみたいですね。あれを観て、本当に現実を忘れられると言いますか、何だろう、タイトル戦負けちゃって、すごく落ち込んでいて悲しかったのに、観ている時はそっちに集中して。あとショーの時も楽しいじゃないですか。悲しい、落ち込んでいる気持ちも忘れちゃったね。それから3年が経ちまして、向こうの大劇場も行くようになりました。ところで先生の初観劇はいつですか。

大地真央さん

伊藤:35年くらい前ですかね。お母様の好きな大地真央さんが主演の作品でした。

謝:初めての観劇が大地真央さんですか、いいですね。

伊藤:その頃の、彼女の歌っていた歌のフレーズに、「I'm just a showgirl」というのがありました。私は、それを、「I'm just a lawyer」って置き換えて口ずさんでいました。「I am what I am」というタイトルのショーもあって、「私は私」他の誰でもない、私は私という個性を大切にそんな雰囲気が好きでした。そこから、他の誰でもない、一人の個性ある弁護士になりたいってね。そう考えると、僕の人生に影響を与えた人ですね。

就位式～「ベルリン、わが愛」

伊藤:話が変わりますが、今年の1月、女流本因坊の就位式での、謝さんのご挨拶がすごく良かったですね。

謝:ありがとうございます。その会場で宝塚に詳しい人は、たぶん私と伊藤先生ともう一人の方だけだったと思います。その2か月前のタイトル戦、5番勝負で2勝1敗での4局目、自分に形勢がいい場面があって、そこで決めたいと思ったのですが、でも負けてしまい2勝2敗となりました。いい戦いをしたのに結果として負ける時ってやはりダメージが大きいですね。でも5局目までの間に宝塚の「ベルリン、わが愛」を観ました。そのストーリーの中では、若い映画監督が苦しい状況で、大好きな映画撮影を諦めようとした時に、ベテラン俳優が「まず映画で戦え」と、「諦めたらそこで終わり」と。そのセリフが心に響いて、もっとがんばらなければいけないと、対局途中で、何度も諦めてしまいそうになったんですけど、その場面、そのセリフ、頭の中で流れてい

るんです。その言葉があって、なんとか5時間くらい耐えてからやっとチャンスが来て、それから2時間後ですね、いい結果で終わることができたのは。この作品、それに続くショーを観て本当によかったなと思いました。

伊藤:第二次大戦前のドイツのことですが、国の政策のために、主人公の映画監督が撮りたいと思う映画を撮れなくなっていく中で、「諦めちゃだめだ」という、俳優の言葉がね。本当にいいセリフで、力がある。謝さんもそれで勝った。台湾のメディアが追いかけてましたね。

謝:なぜかそこしか書いてないですよ(笑)。2勝2敗の時に気分転換、リフレッシュすることがあって、最終局、と、たぶん書きやすかったんでしょね。今度10月に星組公演が台湾であるので、星組の話をしてよかったなと思いました。

世界戦の団体戦勝利が目標

伊藤:では今後の抱負を。

謝:やはり世界戦ですね。世界で個人戦の優勝はとても難しいと思いますが、いま日本の囲碁界は本当に優秀な後輩たちもたくさん出てきているので、団体戦で、何かいいニュース、いい結果を持って帰りたいと思いますね。

伊藤:謝さんは、日本棋院所属、世界戦の時は日本代表ですね。宝塚と一緒に楽しみながら、これからも応援します。私自身も謝さんの活躍に力をもらって、弁護士として、後輩の指導や、もう一段ちがうところからの仕事でお役に立てるようになっていきたいと思っています。一緒にがんばりましょう。

謝:はい。そして宝塚歌劇もまた一緒に観たいと思っています。

私の初めての宝塚観劇は大地真央さん。「私は私」他の誰でもない、私は私という個性を大切に、そんな雰囲気が好きでした。伊藤茂昭

〈プロフィール〉

謝 依旻 (シェイイミン / Hsieh Yi Min)
1989年11月16日、台湾苗栗県苗栗市で出生。5歳で囲碁を始め、2002年日本棋院の院生。2004年入段。14歳4ヶ月でのプロ入りは当時の女流棋士最年少記録を更新。2006年若鯉戦(30歳以下・五段以下の男女混合戦)で、日本棋院初の女流棋士の優勝を達成。その後、女流本因坊、女流名人、女流棋聖を次々と獲得、2016年には女流主要タイトル5冠達成。タイトル獲得数27は第一位。現在は女流本因坊を保持。趣味はヒップホップダンスと宝塚歌劇鑑賞。現在、東京弁護士会宝塚歌劇愛好会特別会員。



T A K A R A Z U K A

2018年前半の宝塚

「東京宝塚劇場と別箱」



《初春から弥生にかけての舞台》

目が離せない名作・人気作品が
目白押し

宝塚歌劇は、2014年に100周年を迎え、その後も名作・人気作品が続き充実しているが、104年目の今年もまた、目を離せない作品が目白押しである。

東京宝塚劇場の正月幕開けは、雪組「ひかりふる路」。望海風斗主演のフランス革命の口ベスピエールを主人公にした作品。私なりの思い入れがあり、別稿で思うところを綴った。

続いて、「ポーの一族」。バンパネラとして生きる運命を余儀なくされたエドガーの哀しみを描いた萩尾望都の漫画が原作。稀代のミュージズ“明日海りお”を得た小池修一郎氏が長年の念願だった舞台化を実現。再現度の高い舞台が評判を呼ぶ。明日海の代表作となることは間違いない。

同じ1月に大阪梅田と日本青年館で上演された、宙組愛月ひかる主演「不滅の棘」は、チェコの代表的な作家カレル・チャペックの原作。先のエドガー同様、永遠の命を与えられた主人公。白で統一された舞台に、愛月の持つ透明感がより一層映えた。主役として舞台を作り上げる力には絶賛を送りたい。同じ永遠の命をテーマにした二作品ではあるが、結末は対極で、共に余韻を残す。

同時期、東京国際フォーラムでは、宙組が名作「ウエストサイドストーリー」。宙組真風涼帆と星風まどかの新トップのお披露目公演。真風がすでにトップの風格のある安定した演技。実力と人気を兼ね備えたトップ率いる宙組の将来に大きな期待を抱かせる作品となった。アニー役の和希そらが好演。

昨年12月に本公演を終えた星組は、閉館間近な中日劇場で紅ゆずる主演の再演物の「うたかたの恋」。私は日程の都合で観劇する機会を失ったものの、愛好会の主要若手メンバーたちが名古屋で揃っての観劇を行った。星組のもう一方は、専科の轟悠を加えた「ドクトル・ジバゴ」。昨年好評を博した「ベルリン、わが愛」の原田諒氏が、引き続きの星組の演出。「魂の自由」を謳う氏は、今夏、明日海で「天草四郎」を描く。



《桜の季節からさつきにかけての舞台》

古典から現代まで
意欲的な挑戦が続く

本公演は4月に月組、原作が現代小説の「カンパニー」。製薬会社からバレエ団に出向させられたサラリーマンが、副題にあるように、“努力、情熱、仲間たち”の力で、メセナ公演を成功に導く。現代社会でありそんな話の中で温もりを感じさせる暖かい作品。併演は「BADDY」。ショーには珍しく

全体を通してストーリー仕立て。上田久美子氏が斬新なアイデアで新風を吹き込む。“BADDY”と“GOODY”を対立させ、二項対立思考の愚かしさもチクリと。

雪組全国ツアーは、「誠の群像」。望海風斗が土方歳三を演ずる。併演は1月本公演で雪組の門出を祝うために創られたショー「SUPER VOYAGER!」。パウは「義経妖狐夢幻桜」、新進の朝美絢が堂々の主役。悲劇のヒーローとして国民に愛されてきた義経像をきちんと踏まえて、頼朝との兄弟間の確執の内面をうまく捉えた秀作である。ロックファンタジーと銘打つが、古典との距離は遠くない。

5月連休は花組博多座公演「あかねさす紫の花」。春野寿美礼と瀬奈じゅんでみた同じ博多座公演を思い出す。今回は役代わり公演で、鳳月杏の中大兄皇子と明日海の大海人皇子のバージョンを観劇。鳳月杏は貫禄十分の兄役をこなし、明日海の持つ個性が弟役に生きていた。レビュー「Santé!!」も楽しい。パウは水美舞斗の「セニョールクルゼイロ」。南十字星をテーマにダンスと歌で魅せる。

さて、5月に宙組「天は赤い河のほとり」。篠原千絵の漫画の超大作が原作。一幕にまとめた苦労がしのばれる。ショーは、宙組誕生20周年ということで、宙組誕生時に上演された宙組の象徴ともいえる「シトラスの風」。明日へのエネルギーというゴスペル場面が圧巻。



《愛好会の活動》

観る側も

「清く、正しく、美しく」

以上、東京宝塚劇場の本公演の4作、バウ公演2作、それ以外の別箱公演6作を、駆け足でみてきた。このように書いてみると宝塚歌劇団の公演回数のすごさにまた感嘆する。宝塚の年間観客動員数は270万人

超。野球でいえば巨人、阪神の主催試合に次いで、ソフトバンクよりも多いのである。宝塚をよく知らない人はみんな聞いてびっくりする。

さて、東京弁護士会宝塚歌劇愛好会は、上半期四つの本公演で、6回の観劇会を開催し、会員はもとより、関連団体等、延べ460人を動員した。本公演以外でも100名近い観劇者数を記録した公演もある。9月1日には3周年を迎え、平みちの「朗読ミュージカル」を主催する。今年の後半も、雪組「凱旋門」、花組の天草四郎を主人公とする「メサイア-異聞」、そして月組愛希れいかの退団公演となる「エリザベート」と目が離せない。

「観る側も『清く、正しく、美しく』」をモットーに、皆さんと共に豊かな宝塚ライフを。

これが、わが愛好会である。

シゲニー・イートン

supported by マリー・イートワネット

T A K A R A Z U K A

〈心に残った一作品〉

◆ひかりふる路◆

～革命家、マクシミリアン・ロベスピエール～

2018年の東京宝塚劇場は、新生雪組の「ひかりふる路」と「SUPER VOYAGER！」で幕を開け、名作・話題作が続いたが、その中から、私自身の学生時代の体験から心を動かされ、かつ美しさをもってする宝塚の主人公としては取り上げるのが難しいロベスピエールを主演とした「ひかりふる路」に触れてみたい。1970年代、高揚する学生運動の中で、私が所属した学生組織で発行した機関誌名は「若きジャコバン」。ロベスピエールはまさにジャコバンを率いる革命の英雄である。私はその作品の上京を待つことができず、昨年11月に幕を開けた宝塚大劇場に足を運んだ。



実政治の中での理念に反する恐怖政治には凜として批判的な立場をとり、最後にロベスピエールが挫折したときには、その理念の意義を説く。ストーリーの流れを二人の関係性の変化で転換させながらすべてが自然の流れの中に収まっている。主人公の恐怖政治もそのまま舞台にのせながら私たちが宝塚的なものと思う許容の範囲に収まっている。

一方、現実政治は、国王の処刑を巡る党派間の対立、ジャコバンとジロンドの対立に留まらず、ジャコバン内部での争い。生身の人間の感情を無視しての政治はありえないと主張するダントンの確執、そして自らもまたテルミドールの乱で、

断頭台に向かうこととなる。

私たちの学生運動もすべてが一つの理念・思想に導かれたものであったが、それがなぜ挫折するか、その答えはダントンの台詞の中に凝縮して表現されていたと思う。人間の楽しみや感情を否定した理念は結局、多くの民衆の支持を得られない。

現実政治に対する示唆を残しながら、舞台では、マリアンヌが捕らえられ牢獄に送られる。一方、テルミドールの乱でロベスピエールもまた捕らわれの身となる。牢獄での再会で、自らの理念が無意味だったと語るロベスピエールに対し、それは意義あることだと励まそうとするマリアンヌ。互いに愛情を感じながら現実政治の前に無力な理念と無力な愛。そのやりとりは切なく胸を打つ。

「自由・平等・博愛」の思想は、200年以上経過した今の世にあっても色あせることなく人類の普遍的価値である。

さて、この難しいテーマに挑戦しつつ成功を収めたのは、脚本もさることながら、主演の望海風斗の歌唱力・演技力によることが大きい。望海風斗は、次に主演した「誠の群像」の土方歳三といい、信念のある男を演じたら、天下一品である。またマリアンヌを演じた同じ歌唱力抜群の真彩希帆。加えてワイルドホーンによって提供された楽曲の素晴らしさ、である。

最後に、「自由・平等・博愛」がゆきわたり、宝塚を楽しむことができる平和な世が続くことを祈りたい。

東京弁護士会宝塚歌劇愛好会会長
シゲニー・イートン

ロベスピエールは、フランス革命時代の作品にしばしば登場する。しかし、主人公ではない。「自由・平等・博愛」を掲げたフランス革命の立役者でありながら、革命政権成立後はその維持のために、うち続くジロンドやジャコバン内部の党派対立の中で、革命の理念とはほど遠い恐怖政治の指導者として名を馳せる。その様は華やかな宝塚の舞台にはふさわしくない。

そんなロベスピエールをどのように描くのであろうか。多くのファンを魅了しているフランス革命ものは、漫画に原作のある美しい「ベルばら」、すでに外国で成功したミュージカルの宝塚版である「スカーレットピンパーネル」「1789—バステューの恋人たち—」などである。

一方、「ひかりふる路」は宝塚のオリジナル作品。ロベスピエールを主人公とすれば、必然的に恐怖政治という影の部分も舞台にのせないわけにはいかない。主人公のこの影を宝塚のファンに許容される形でどのように描くのか、期待と不安を胸に抱き「ひかりふる『はなの路』」を大劇場へと歩んだ。

さて、生田大和先生の脚本はお見事というしかない。さすが「わが愛する宝塚」は、簡単に私の期待を裏切ることはなかった。この作品の成功は、マリアンヌという創作上の女性を登場させたことに尽きる。マリアンヌは、両親や婚約者を革命で殺害された貴族である。革命の象徴的指導者ロベスピエールに殺害目的で接近する。何度か機会がありながら、殺害に至らない。失敗か、何らかの躊躇か、敵役に対する愛情の芽生えか。自然な史実の流れに合わせて、マリアンヌはロベスピエールの持つ崇高な理念に、ときに対峙し、ときに共鳴し、しかし現



弁護士作家が著す 本格的時代小説 日経小説大賞を受賞

私が、18年ほど前、日本弁護士連合会で事務次長として弁護士会館の常勤弁護士として務めていたころ、行政法・環境法の専門家、弁護士というよりは学者タイプの好青年が、日弁連嘱託として勤務していた。

その弁護士の名は、越智敏裕。その後も法学部で教鞭をとっており、学者・教育者としても活躍する弁護士とばかり思い込んでいた。

そんなある日、私の手許に1通の招待状が届いた。そこには、第9回日経小説大賞、授賞式・座談会にご出席ください、とある。

何だ、これは？

そこに記載された小説家「赤神諒」。それが彼の晴れ舞台登場のペンネームである。いつこんな小説を書いていたのだろう？本業があるのにどこで時間を作っていたのだろう？法廷ものを書く弁護士・小説家はいる。しかしこれは本格的時代小説である!!

「大友二階崩れ」がそのタイトル。しかし応募にあたって、彼が最初に付けたタイトルは「義と愛」。これでは私の大好きな「越後の上杉・直江」である。

日経の売り出しにあたってタイトルは、「大友二階崩れ」に変更された。戦国時代、九州の大名、大友家のクーデターが二階で勃発したことに因む。

この日は、赤神諒に加えて、選考委員の辻原登、高樹のぶ子、伊集院静という面々を加えた座談会が行われた。

赤神諒の受賞スピーチがまた楽しい。授賞式前日も夜遅くまで飲んで販促に励んでいた話、題材は大小説家が書いていない戦国時代の人物を北から順にたどっていたら九州まで行ってしまったという話など。聴衆を飽きさせない。

さて、今まで、私の知人で著書を上梓された方は皆さん、その作品をご恵送くださった。今回は、授賞式・座談会のご招待状だけであった。しかし、当日の赤神さんや選考委員の方々の話を伺っているうちに是非とも読みたいという気持ちになり、さらには知り合いにも読んでほしいという気持ちになり、会場で5冊ほど買い求めた。赤神さんの販促戦略にうまくのせられたのである。

購入後翌日から、二日くらいで、読んでしまった。面白い。

さて、「大友二階崩れ」のストーリー。



『大友二階崩れ』

赤神 諒 著
日本経済新聞出版社
定価：本体1600円＋税

主人公は大友家の重臣の吉弘家の兄弟、兄の吉弘左近鑑理（あきただ）と弟の吉弘右近鑑広（あきひろ）。主君義鑑（よしあき）は、自らの愛妾の幼子を次期当主にしようと、正妻の嫡子義鎮（よししげ）（後のキリシタン大名大友宗麟）の廃嫡をこころみる。しかし、この試みは失敗に帰し、逆に義鑑（よしあき）は大友館の二階で殺害され、嫡子義鎮（よししげ）のクーデターが成功する。しかるに、義に生きる兄鑑理（あきただ）は義鑑（よしあき）死亡後もその忠義は変わらぬまま。新当主の大友義鎮（よししげ）派の重臣の中で自らの地位の不安定を招き、吉弘家の将来を危うくしていく。

一方、弟鑑広（あきひろ）は、城攻めで助けた敵方の武将の姫を助け、その愛に生きる。楓という名の美しい気品の高いその姫との家族の生きざま。兄弟の確執も含めて、ストーリーの展開に飲み込まれていく。そしてそれぞれの場面の情景描写など文章が美しい。彼のどこにこんな文才があったのだろう。

クーデターの双方のどちらに味方するか、そしてその中を泳ぎ抜く策士たる武将たち。

いずれにしろ舞台の場面場面の展開が思い浮かぶような描写の作品である。

また、大友家を題材にした新刊「大友の聖将」が7月に角川春樹事務所から出版予定、さらに二階崩れの続編も準備中ということで、ますます目の離せない本格的時代小説作家として期待が高まるばかりである。

シゲニー・イトン



授賞式終了後、日経ホールにて



弁護士の中から裁判官を!!

日本弁護士連合会に弁護士任官等推進センターという委員会があります。私は今年度、この会の委員長を務めています。

主要な任務は、弁護士任官、すなわち弁護士の中から裁判官になる人を送り出すことです。多くの国では弁護士を経験した人の中から裁判官が選ばれていく制度がとられていますが、日本では、弁護士を経験してから裁判官になる人は、裁判官の2%にも満たず、大半が司法修習修了と同時に判事補となり、他の職業を経験しないまま裁判官になっています。多様なキャリアの中で人権感覚・市民感覚を涵養した裁判官を一人でも多く輩出することは、司法の機能を充実させて行く上でも重要です。

現在は、裁判所においても、裁判官に多様な経験を積ませることを重視し、裁判官に、一定の期間、民間の企業や法律事務所での職業を経験する制度が行われています。いわゆる裁判官の他職経験制度ですが、その受け入れ事務所の推薦もこの委員会の担当です。

さらに、現在は家庭裁判所や、簡易裁判所で、週一日、弁護士が弁護士の資格を持ったまま裁判官として勤務する非常勤裁判官の制度も整備され、全国で現在118名の非常勤裁判官が活躍しています。この制度は定着しつつありますが、この中から、多くの常勤裁判官に転身する方が出てくるよう期待しています。他の裁判官制度の改革と合わせ、市民に身近な裁判所、司法制度とするために微力ながら努力したいと思っています。

弁政連を強い組織に

日本弁護士政治連盟という組織があります。全員加盟制の日本弁護士連合会、各弁護士会の政策を実現するための任意加入の政治団体です。

弁政連は、国政選挙における弁護士議員をはじめ候補者の推薦、日弁連執行部と各政党の幹部や司法・法務関係の議員との会合の設定、弁護士業務に関連する様々な問題、国民の人権にかかわる法律についての議員への要請活動、等を行っています。昨今では、司法修習生に対する経済的支援として「修習手当」を支給する裁判所法の改正を実現したことは、この間の活動の大きな成果です。

私は、弁政連の活動に継続的にかかわってきました。10年前になりますが、2007年から09年にかけては幹事長として全国を飛び回り、多くの支部の設立に関与しました。昨年度は、副理事長・総務委員長として、国政選挙の議員推薦などを担当しましたが、今年度は、副理事長・組織強化委員長として、会員の増強・支部の強化に取り組みます。

そして人権擁護と社会正義を標榜する弁護士の中から、自分がこの国の未来を担おう、という気概とポリシーを持って政治家を志す若手弁護士が、多数出てきてほしいと願っています。

東京弁護士会の同好会制度

東京弁護士会には、平成27年に発足した会が公認する同好会制度があります。会員が文化・芸術に親しむこと、同好の仲間と交流することは、会員同士の絆を強め、会員の会に対する帰属意識も高まるという効果も生まれるのではないかと思います。

東京弁護士会の細則では、公認の要件として、「公認するに相応しい健全な目的と実体を有する」という中心的な実質要件に加えて、「本会会員が20名以上存在すること」「活動実績が1年以上あり現に活動していること」「会則、活動責任者、会計責任者、会員名簿などが備えられていること」があげられています。

因みに私が東弁会長の任にあった27年には、長い伝統のある「囲碁」と「将棋」が公認団体となりました。この二つは、古くから多くの弁護士が嗜んでおり、いずれもかなりの高段者がおられます。その後、活動実績と組織の整備によって公認団体として認められたのは「ゴルフ」と「宝塚歌劇」の二つです。

私は、「オペラ」「歌舞伎」「バレエ」「詩歌」など、様々な分野で同好の士が集い、公認団体として活動することが、弁護士会の多様な福利・厚生の一環ではないかと考えています。

1980-1982 「山本忠義法律事務所」「山本・泉法律事務所」時代—その2—

当時の思い出「一番褒められた出来事」

私は、修習生の時から、山本忠義先生と泉信吾先生にお世話になっておりました。私は新潟大学医学部在学中に学生運動で逮捕・起訴された経験があり、司法試験合格後もその年には司法修習生として採用されませんでした。兄の高校の同級生であった泉先生のご紹介で司法試験合格後、山本先生に保証人になっていただき、何度か、最高裁判所に通いました。学生運動の激しかった当時の合格者の中には私だけではなく何人が同様の待機組がいました。その期間は、司法試験予備校で講師をしたり、泉先生のアルバイトということで生活上の糧をいただいたり、中央大学学長の戸田修三先生の商法ゼミのお手伝いをしたり、まだ助教になったばかりの、後の学長・総長の永井和之先生のところに顔を出して勉強をしたりしながら、採用を待っていました。遅れて司法修習生となったあとも、先生方にはずいぶんとお世話になりました。私は、修習1年目に、司法試験の研究室で一緒だった妻と結婚しましたが、戸田修三先生ご夫妻に媒酌人をお願いしました。披露宴で山本忠義先生は主賓のご挨拶の中で、いままで一切話がなかったにもかかわらず、「伊藤君は修習を修了したら私の事務所に入ることになっているのだが…」と切り出し、それが私への一方的な強制採用通知となりました。修習生になるのには苦労しましたが、事務所は考えるいとまもなく、天の一声で決めていただき、それはそれでとてもありがたいことでした。

入所してからは、事件の処理は自由で何でも任される代わりに、今のように手取り足取り教わるといことのない時代でした。

入所まもなく、自分ではかなり力を入れて書き上げた二十数ページの準備書面を山本先生に見ていただいたところ、先生は、2〜3ペー

ジをさらさらと目を通して、あとは読まずに、褒めもせず、直しもせず、ただ「伊藤君、これでいいよ」とだけ軽く言うておしまいでした。そんな調子でしたが、事務所では、毎日、楽しく仕事をしていたと思います。電話で対応する口調は、いつのまにか先輩の泉先生に似てきていました。教わることもなく教わっていく、そんな三年間だったと思います。

山本事務所では所員の家族も一緒に事務所旅行がありました。旅行の途中、山本先生の軽井沢の別荘へお邪魔したとき、先生が鍵を忘れたため全員が別荘の前で立ち往生する羽目になりました。私が別荘の裏手に回り、木戸があったので、それを持ち上げると運良く外れました。それで事なきを得、全員で別荘に入ることができたのですが、「伊藤君は、学生運動をやっていたのでいろいろなことができるな」と、すごく褒められました。山本先生に一番褒められた出来事として今でも思い出として残っています。

私が入所した翌年、山本先生は日弁連会長になりましたが、その選挙運動は私と日弁連との関わりの出発点になりました。そんなご恩の先生は平成14年8月16日、81歳で亡くなりました。まもなく没後16年になり、月日の流れの速さを感じています。

※なお、この白い雲発刊準備中の平成30年5月21日、戸田修三先生がご逝去されました。合掌



〈弁護士 伊藤茂昭の主要取扱分野〉

不動産取引・建築紛争・借地借家・会社法関係・相続・遺言

Tel:03-6212-5503(直通・秘書)

Mobile:090-1547-4357

e-mail:shigeaki.itoh@city-yuwa.com

〈白い雲Weblog〉URL:www.shiroikumo.jp



シティユワ法律事務所

〒100-0005

東京都千代田区丸の内2-2-2 丸の内三井ビル(受付7F)

Tel:03-6212-5500(代表) Fax:03-6212-5700

URL:www.city-yuwa.com

※千代田線「二重橋前」駅のリニューアル工事に伴い、4番出口が閉鎖されています。工事期間中は、5番出口(5a)をご利用ください。



編集後記

今回は、久しぶりに対談記事を掲載致しました。謝依旻さんのお話は、興味深いものばかりでした。囲碁を嗜まれる方にもそうでない方にも、楽しんでいただけるのではないかと思います。謝さんのご趣味でもある宝塚歌劇のページは、「ひかりふる路」を取り上げました。宝塚歌劇には、この作品のように、エンターテインメントの衣を纏いつつ、大変深いテーマが内在する作品が多数あります。また、前号から開始しました「事務所の歴史」。この38年は、奇しくも、日本の法律事務所の形態の変遷と軌を一にしています。山本・泉事務所時代は、今となっては信じられないくらい牧歌的な雰囲気でした。次号以降、事務所がどのように変化していくか、時代の移り変わりを思い浮かべながら読んでいただくと幸いです。

編集人 伊藤真理子

季刊「白い雲」通刊65号
2018年7月発行

発行人：伊藤茂昭
編集人：伊藤真理子
制作：株式会社創林社
印刷：神谷印刷株式会社